〔書評2〕

元田與市著『雨月物語の探究』

山下久夫

典拠論を中心に飛躍的な展開を遂げてきた『雨月物語』研究も、飽和状態を迎えたと言われて久しい。「白峯」に『選集抄』や『保元物語』、「菊花の約」に中国白話小説集『古今小説』の「范巨卿雞黍死生交」、「浅茅が宿」に明時代の雅文短篇小説集『剪燈新話』の「愛卿伝」というふうに、和漢の書を典拠として並べそれを作者上田秋成がどう消化しどう超えて独自の作品を創造しているか、といった形での『雨月物語』研究。どうやら、これも出尽した感がある。典拠と創造の関係も、視点の変更を迫られているようだ。

考えてみれば、あたりまえのことではある。〝創造〟というけれども、その内実はこれまで多分に近代主義に依拠していたわけだし、〝典拠〟の方は、何か固定したテキストを脇に置いている秋成を自明としてきた。だが、典拠にテキストを固定して創造を論じると、かえって『雨月物語』の奥行きが見失われるのではないか。全体のプロットはともかく、典拠の文章表現などは、諺や慣用句として『俚諺集』にも載り近世の庶民相に深く浸透していた事実がある。この点を、もっと重視すべきではないか。つまり、典拠をある特定のテキストに固定したのでは、これ以上もう何もみえてこない。それを近世庶民の生活や信仰のレベルにまで広げることで、『雨月物語』という作品の新な貌を期するのである。稲田篤信『江戸小説の世界』所収の「典拠とテキスト」は、そうした観点から〝典拠〟の意味を問い直した論だった。

要するに、どのような意味で〝典拠〟なのかが問われなければ何もはじまらないのである。そして、こうなったのには、やはりそれなりの理由がある。すなわち、〈近世〉という時代の意味があらためて問い直されているのだ。直線的な近代主義から解放された〈近世〉には、〈中世〉と〈近代〉が複雑に絡み合った相がそのままある。〈近世〉の中に〈近代〉があり、同時に〈中世〉もある。当然といえば当然だが、わたしたちは、こうした〈近世〉のあり様を充分対象化する方法を未だもち得ないでいる。しかもこれは、わたしたちの生きる〈近代〉の根拠をどう考えるかという問題と密接に関連するから、一朝一夕に安定した方法が出せる

はずがない。とりあえずは、近世庶民の生活や信仰にまで降りて、一つ一つ絡み合いを解きほぐしていくしかないだろう。だが、〈近世〉とは何か、という問いかけだけは絶対に手放してはなるまい。

『雨月物語』研究も、右のような問いかけをもった新しい基軸を欲している。しかし、従来の典拠と創造を超える視座は容易には見出せぬ。誰がやっても、陳腐な論の言いかえになりかねない。最近、秋成研究は結構盛んである。が、多くは、テキストの本文が不安定なために研究の進んでいない『春雨物語』や、その周辺に集中しているのが実状だ。

こんな中で、あえて『雨月物語の探究』を公刊した著者の勇気と志に、まず敬意を表したい。研究状況が未だ新基軸を出せぬ以上、『雨月物語』に関する立論は、やればやるほど自ら解体を余儀なくされる場合も考えられる。そうした逆説的な状況をも引き受けようとしている態度に、好感がもてる。

さて、著者は、「はじめに」で本書のモチーフを次のように語っている。

そもそも自己と現実世界との軋轢やそこから生じる不安や焦燥、といったいわば危機意識はわたしの頭から常づね離れることのない固執モチーフともいうべきものだが、徳川の世が裡なる脅威にゆらぐ、そんな時代の産物である『雨月物語』には、作品の生みだされた時代状況にもっと目をくばった〝読み〟が必要なのではなかろうか、（中略）翻案小説としての面からさまざまな検討を加えることはもちろんのこと、当時の政治や文化等の情況をふまえながら、同時に秋成の文学、学問、思想、さらには人生や実生活などを視野におさめた、いわば秋成という個性の〝総体〟と時代（社会）とのかかわりを重視した〝読み〟こそ、『雨月物語』の本質にせまる重要なルートにちがいない。

著者も、典拠論を中心とした『雨月物語』の研究史については、充分自覚しているようだ。しかし、今は典拠との比較よりも、時代状況とのかかわりを重視した〝読み〟に賭ける。『雨月物語』をいかに〝読む〟か、が本書の課題である。研究史の累積をはねのけて新しい〝読み〟を打ち出すのは至難の現状だが、著者は、果敢に挑戦するかのようだ。

確かに、「白峯」から「貧福論」に至るまで、全篇にわたって妥協なく自分の〝読み〟を貫いていると言ってよい。「白峯」で、崇徳院と西行の論争を易姓革命の是非という問題だけにしないで、中央から辺境への視線（西行）と辺境の極地から中央を侵すエネルギー（崇徳院）との、対立の暗喩とみる点。「菊花の約」で、信義の物語という従来の説を完全にひっくり返している点。「夢応の鯉魚」で、老荘的自由に憧れる興義という「遊心」的解釈に収斂させずに、同じ老荘でも、自然のなかに宿る美を発見する「遊目」的発想で解釈している点。あるいは「仏法僧」で、弘法大師の玉川の歌の考証部分について、「構成上の破綻」とか「知識性の披瀝」といったこれまでの解釈の無効を強調し、それを著

者のテーマである時代の〈不確かさ〉に結びつける点……。いずれも、先学の説に巻かれずに持論を展開する姿勢が感じられて心地よい。文体も、力強いものがある。

ところで、『雨月物語』を〝読む〟際、著者は、秋成の生きた時代とのかかわりを重視する。当然、〈近世〉という時代への問いかけがなければならないはずだ。それが、本書の価値を決めることになるだろう。事実、「秋成は庶民の共同観念のなかに成立している、平和で穏やかな近世の、そのイメージをゆるがす情況を暗示し読み手につきつけているのである。ここには、安泰ムードとは裏腹な現実を時代のなかに見てとっている秋成の姿がほのかにゆらめいている」(「仏法僧」)と述べて、著者は、近世庶民の共同観念にある安泰ムードへの警鐘という形で、作品と時代とのかかわりを論じている。「白峯」、「仏法僧」、「貧福論」などをみると、〈近世〉という時代が、「確かさの不在」としてイメージされているようである。

しかし、あらゆる意味において興味深いのは、「菊花の約」に関する言及ではないかと思われる。〝読み〟の斬新さが目を惹くと同時に、〈近世〉の意味をあらためて考えさせてくれるからだ。「菊花の約」といえば、清廉潔白な学究の徒丈部左門、忠義の臣たる赤穴宗右衛門、この両者の男同士の純粋で一途な信義を主題とした作品、というのが大方の了解だった。衆道や秩序への反逆をみる論もあったが、それとて信義の物語を前提としていた。ところが、著者にかかると、まったくちがうイメージが描かれる。

著者はまず、左門を「文明に生きながら、いまや過去の遺物となった大時代精神＝献身の道徳に生きる、同時代性を欠いた」人だと言う。つまり、世間に疎い時代遅れの人。左門の清廉潔白さを従来にはないマイナーな口調で語るのである。そして、一方の宗右衛門像について、意表を突くような見解を述べる。すなわち、副題に「左門幻想」とあるように、著者は、宗右衛門像は右のような左門の一方的な思いこみや幻想によって造られたものにすぎぬとし、その幻想を暴く方向に論を進めるのだ。わたしたちがこれまで自明としてきた宗右衛門像は、実は左門に押しつけられたものだったということになる。したがって、以後の論は、左門幻想の宗右衛門像とそれとはちがう貌をもつ宗右衛門との間の分裂やズレを、秋成が読者に伝えるべくどう腐心したかを叙述していく。

注目したいのは、宗右衛門像がほとんど彼の言葉、会話文でなされ、地の文による客観描写はないという指摘である。著者はここに、左門像に比し宗右衛門像の安定しないいかがわしさをみる。そして、いかがわしさを導き出すために、思いきった補助線を引いた。すなわち、「自己保身のために鞍替えも辞さ」ず「相手に合わせていくことで生きのびていく処世術にたけた」ところの、「渡り者」的性格をもった室町～戦国期の武士の姿を介在させるのである。その介在によって、左門幻想の信義に厚い宗右衛門像は分裂をきたし、読者は別の貌をもつ宗右衛門に気づかされるわけだ。意表を突く補助線を引きつつ「菊花の約」の本文から分裂

やズレを導き出す著者の手法は、いささか強引で深読みという感なきにしもあらずだが、従来の宗右衛門像を壊す効果としては結構刺激的だ。

出雲に下向してからの宗右衛門をめぐる経緯が、『陰徳太平記』や『雲陽軍実記』等の史書を典拠としているのはよく知られている。が、著者はここでも、会話文と地の文のちがいに留意を促した。たとえば、尼子経久に関する評。「菊花の約」では、宗右衛門の会話を通して「智を用うるに狐疑の心おほくして。腹心爪牙の家の子なし」と語られるに比し、典拠となった史書では、反対に家臣に慕われる慈悲深き名将と評す。もし史書の経久に匹敵する描写を「菊花の約」に探すとすると、末尾の部分、すなわち、宗右衛門の仇として赤穴丹治を討った左門を兄弟信義の篤さをあわれんで強いて追討しなかった部分になるわけだが、ここは、会話文ではなく地の文である。つまり、虚構は宗右衛門に語らせ、真実は地の文で示すのである。この巧妙なスイッチによって、読者は宗右衛門のいかがわしさ、人格的分裂に気づかされる仕かけになっているのだと言う。実に新鮮な〝読み〟だ。

さらに、自説の補強のために、著者が挿絵に着目した点が意義深い。挿絵との関係は、今後近世小説を〝読む〟際の重要な鍵をにぎると思われるからである。ところでこの挿絵は、「菊花の約」のストーリーの一場面ではなく『陰徳太平記』のそれなのだが、この意味にいて著者は次のように説明する。

一編の背後に『陰徳太平記』の存在を想起しうるほどの読み手であれば、挿絵の情景がその一場面であることを見やぶることはたやすいし、逆に挿絵から『陰徳太平記』を想起することも困難ではないはずだ。「宗右衛門」の発言にふくまれる〈虚〉が挿絵から連想される『陰徳太平記』という〈実〉と不協和音を奏でることで、そこに「宗右衛門」の虚偽性がおのずと露見するという仕組みである。

この解釈が正しいかどうかはともかく、着眼はみごとだ。挿絵からこれまで自明とされてきた「忠義の臣」宗右衛門像がひっくり返るのだから、何とも痛快だ。三島由紀夫は何と言うだろう。

さて、こうなると、冒頭「交りは軽薄の人と結ぶなかれ」の「軽薄の人」も、その内実が変ってくる。従来は、左門も宗右衛門も冒頭文とは逆の「信義の人」だったのだが、著者は当然そうは考えない。「軽薄の人」とは、時代遅れの幻想のために宗右衛門のいかがわしさを見破れず赤穴丹治を一刀の下に斬り捨てた、左門その人ではないかと言う。そして最後に、「菊花の約」という題名にふれ、「菊花」＝変節（宗右衛門）と「約」＝信義（左門）とを亀裂を含ませてとりあわせた秋成の意図に留意しつつ、一篇を反信義の物語に仕立てあげた。

このように、著者は、信義の物語という従来の共通了解を根底からくつ返す。しかし、わたしがこの章にこだわるのは、〝読み〟の斬新さに啓発されたばかりではない。〈近世〉という時代を考えさせてくれることにもよる。近世の儒教思想は、戦国期の武将の論理を秩序の中に解消した。「渡り者」的位相のもつリアリ

ティーは、牙を抜かれ隠蔽されて一つの理念体系が確立する。しかし、十八世紀になって秩序が動揺してくると、隠蔽された〈中世〉が再び貌をのぞかせ〈近世〉の〈近世〉たる所以を問うようになる。著者は、戦国武士の姿（中世）を介在させることで、近世儒教の根本をなす「信義」の虚偽性を暴いた。その過程で、插絵という新しい領域を〝読み〟の中に導入したのである。十八世紀には、各地域の伝承や説話を再編する動きが出てくるが、これは著者の言う〈不確かさ〉と無縁ではあるまい。〈不確かさ〉が強く意識されるのは、〈中世〉の復権でもある。むろん一方で、出版文化のルートに乗って〈近代〉が孕まれており、〈中世〉はこの〈近代〉と複雑に絡みあっている。そして、この絡みあいが〈近世〉だ。〈近世〉を解きほぐすのに、これまでは〈近代〉から照射することが多かった。だが著者は、少なくとも〈中世〉の視線が重要であることを示してくれたように思う。

また、典拠との関係について、著者は格別目くじらを立てるわけでもなくごく自然に自説の文脈に融解しているが、插絵への言及などによって、案外、近世庶民の生活や信仰を媒介とした新しい典拠論を開示してくれるかもしれない。どのような意味で〝典拠〟なのか、近世における〝典拠〟の意味をじっくり問うた論を期待したいものだ。ともかく、この章は、今後の新な〝読み〟を模索する上でのたたき台になる価値はある。

紙数も尽きそうで、残りにふれる余裕がなくなった。印象に残った章のみ、簡単に記そう。が、正直なところ、どの章にも「菊花の約」ほどのインパクトは感じなかった。一番知りたい点が、いつも言いさしのままで深められていない気がする。ただ、「仏法僧」での、「確かなことを語らないことが確かなことを語る、という逆説的手法」に「近世という時代の〈不確かさ〉」を見出すあり様に、興味を覚えた。なるほど近世は〈不確かさ〉の時代だが、たとえば宣長などは、〝確かなことのみを語る〟というスタイルをとりながら、〝不確かにものは不確かなままにしておけ〟と言う。こうした形で〈不確かさ〉に市民権を与えるのは、〝確かなこと〟を前提にしている点で、〈近代〉の不可知論である。比するに秋成の逆説的手法には、宣長の隠蔽した〈近世〉がうかがえるようで面白かった。

「白峯」と「貧福論」は、セットにして読んだ。著者は、平和を謳歌する徳川の世に秋成が亀裂を走らせ、〈不可視の脅威〉、〈裡なる異国〉を浮上させたとする。これは近世における〈異界〉の問題であり、十八世紀のわが国の問題としてもっと原理的に考察してほしいところ。キーワードが、まだ深さを獲得していない。

「蛇性の婬」での紀州熊野も、同じ問題を孕む。熊野は、「さかしら」から直き「まめ心」に回心した豊雄が真女子を葬り去る舞台となった。ここでは、近世における〈異界〉たる「熊野」の意味をもっと解析すべきではないか。そして、末尾での、真女子の調伏が豊雄の「まめ心」の勝利に見えながら裏を返せばそれは豊雄が村＝共同体にからめとられていく過程でもあった、との指摘。本章ではほんの予兆的に述べられているにすぎぬが、むしろ

この点こそ中心テーマになると思われる。それは、近世における「熊野」の意味と深く通じると同時に、作品のフィールドを近世庶民の生活や信仰にまで広げることになるだろう。そうした視点でみると、「吉備津の釜」で、〝御釜祓い〟という神事の近世的意味がなぜ正面から問われないのかが解せない。女性視点から把えた「男性論」、というテーマにどれほどの意義があるのだろうか。

「夢応の鯉魚」は、江戸時代の人が「碧」をどのようにイメージしていたかが明らかになれば、もっと説得力が増すはずだ。

以上、わたしの文脈に引きつけすぎて、著者の意図を随分と外したかもしれない。だが、いろんな〝読み〟をされるのも、本書の本望だろう。現在の『雨月物語』研究は、一冊にまとめれば定説ができるといった状況にはない。まとめたかと思うと、解体や再構成がまたたくまに進行する。「おわりに」で、著者が堂々と〝自分の『雨月物語』論は文字どおり未成熟だ〟と言い切っているのは、現在の状況を充分自覚している証だと思う。それだけに、まとめた段階で当面どのような困難さや課題がみえてきたのかを明記してほしかったのだが……。

（平成五年四月刊、翰林書房、二四七頁）

（やました・ひさお　金沢女子大学）